短距離で結び、農産物の流れを円滑にするため、天草五橋と離島振興計画との関連を調整しながら、農業重要路線の整備を行なうこととし、県道八本、市町道八本を整備する計画である。

なお、この事業は国の助成を得て行なわれるが、本県としてはこの事業の重要性に鑑み、特に県独自に助成策を講じて事業の推進に資することとし、昭和四十二年度予算から事業費補助を計上した。

■事業実施を前にして

以上の基本構想にもとづき県としては圏域内の各種団体と充分な意見調整の結果基本計画の作成を終り、去る六月二十九日付けで農林省の承認をうけ、さらにその後、事業実施計画を策定した。

また全体事業実施計画書及び昭和四十二年度の実施計画書もすでに十月五日に国の認定をうけたので、本年度から四カ年にわたり事業を開始することになった。

この事業のねらいが初めに記したように、天草八万の農業者のための農業近代化の事業ですから、地元に設置されている推進連絡協議会はもとより、天草農業経済圏一部事務組合および天草地域農業協同組合連合会を中心に、関係農業団体及び農業者が十分に事業の意義を理解していただくとともに、自らの手によって農業生産を拡大し、流通機構も改善する熱意に燃え、事業を立派にやりとげることが肝要だろう。（農業構造改善課）

〝羊角湾は黄金（こがね）の水よ〟

――水と羊角湾地域開発――

羊角湾には一町田川をはじめとして五本の河川が流入している。その背後流域は約百平方㌔ある。年間の降雨量を千㍉とみても一億立方㍍の降水がある。一億立方㍍の水を貯溜するためには、湾の入江を締切り、これを淡水湖にすれば良い。湾の面積を一部干拓しても二百万平方㍍、利用水深を一㍍にしても二百万立方㍍の用水が確保できる。

二百万立方㍍の貯水池があれば、河川の流入量と相まってその利用の範囲は農業ばかりではなく、例年のようになっている深刻な牛深市上水道の水不足も抜本的に解決される。

また、漁業の面においても牛深港は東支那海に出港するのに好位置にありながら、水がないために、せっかくの水揚げを鹿児島の阿久根で行なっている。また、出港する漁船にとって命の綱（ぢな）は船泊用水だ。牛深港から船泊給水する蛇口は一つ。これでは牛深に寄港する漁船が減るのも無理はない。

さらに水がないことは、せっかく製氷会社を持ちながら氷の製造ができないことにもなる。遠くに出漁する漁船にとって氷が積めないのも魚の鮮度を低下させ、ひいては商品価値を低下させることになる。

このように水がないことが牛深市の漁業をまた市経済を不振にしたといっても過言ではあるまい。

次に、この地域に将来オレンジベルトが形成された場合、漁業振興と相まって、みかんと魚の食品加工工場も可能になってくるが、この際もっとも必要になってくるのも水である。

また、現在原石として出荷している砥石も、水と電気と石炭があれば、必ずしも名古屋まで搬出しなくても現地で製品化されるであろう。

このように水の乏しいことが下天草地域の発展を阻害しているわけだが、逆にこれが豊富に供給できたら当地域の社会環境も産業開発も一新されるであろう。

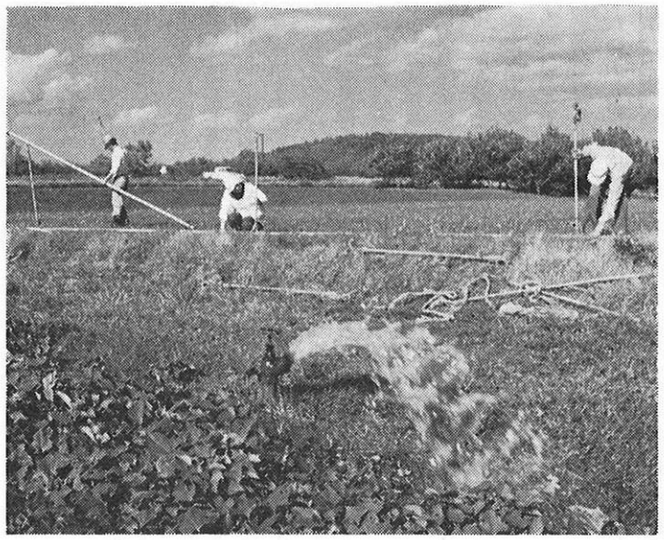
河浦町の「羊角湾音頭」の一節に「羊角湾は黄金（こがね）の水よ」という歌詞があるが、まさしく水が地域開発の原動力であることを、いみぢくも表現している。羊角湾の締切りも四十二年度から農林省の国営事業として採択され、四十三年から本格的に締切り工事が着手されることになった。

締切りも完成し、豊富な水を擁した淡水湖が実現し、水によって農業をはじめとして関連産業が開発され、社会条件が好転される日も決して遠い日のことではない。

その時こそ締切り堤塘の上で「羊角湾音頭」に合せた盆おどりも心から楽しむことができるであろう。

菊池台地の農業開発

菊池台地の地理的条件をみると、東は阿蘇西外輪山麓、北は菊池市八方岳山麓、南は白川北岸、西は金峰山麓まで展開されている台地であって、本県の中心部に近い「地の利」と、おおむね平坦で広大な土地資源を有している。そしてその開発のカギは、まず水の効果的な利用ということになるが…。



＜畑かん事業も活発に……合志町にて＞

菊池台地と筑後川総合開発

水と農民の歴史

明治二十三年に熊本測候所が開設され今年で七十七年目になるが、今年程の大干ばつは測候所の記録にはなかった。干ばつで被害を受けるのは畑作農業であるが、菊池台地も例外ではなく皆無に等しい大被害を受けた。

その中にあって深層地下水を水源として開田した地域だけは日照時間に恵ぐまれ反当り十俵を下らない収穫の秋をむかえて、笑いがとまらぬ大豊作であった。すなはち今年ほど水の有無が喜怒哀楽の明暗を分けたことはなかった。

この対照的な現実は古くから菊池台地の農民は知っていた。そのために非常な苦労をして水を求めてきた。一つの事例として古川兵戸井手は百四十年前大分県の津江川上流川原川から総延長十七㌔内隧道十六ヵ所延千二百四十㍍、労役人夫延七万五千三百三十一人、経費は銀三百五十四貫（現在価格約一億四千万円）を費し曲折九年の歳月を用して天保六年に完成している。いまなお熊本、大分県境にまたがる兵古峠に往時の隧道の遺跡をみることができる。

なお記録には湯舟溜池など多くの農業水利の施設が今日において利用されているが、特に菊池川が河川流域一平方㌔当り水田面積は十五㌶あって、それはそのまま河川の利用率をしめしている。すなわち利用率は一五％であって県下において白川に次いで利用率の高い河川であることは、古くから利用できる水は高度に利用されてきたことを物語っている。

しかしながら、なお二万㌶に亘る畑地を残しているが、昭和三十五年から深層地下水利用のため試掘し、これを水源とした開田が契機となって、現在約四百本の深井戸で約二千㌶の開田が造成され